

# 開成校新聞

発行 開成中等新聞局  
発行責任者 宮崎  
\* \* \*  
制作者 小川

1/365コマ



入部・入局シー  
ズン! 新聞局  
員が待ってる  
よー

## 自分が平和を考えてもらえるきっかけに 第26代北海道高校生平和大使 上坂芽生さんにインタビュー

### 「平和って意外と脆い」



▲インタビューを受ける上坂さん

昨年、日本被団協(日本原水爆被害者団体協議会)がノーベル平和賞を受賞した。受賞を受け、本校から2023年度に北海道高校生平和大使に選ばれた、上坂芽生さんにインタビューを行った。上坂さんは、「もともと多くの人に平和について考えて欲しいと語った。」

Q1 平和大使を  
目指した理由を教  
えてください。

A1 私が中学3年生の時に広島旅行に行き、原爆資料館を訪れました。そこで実際に展示されていた資料や映像を見て、被爆について知ってい

ると思っていた自分が愚かだと感じました。そして、この思いを自分以外の人にも知って欲しい、と思い目指しました。

Q2 実際に高校生平和大使になり、どのような活動を行いましたか。

A2 北海道で「高校生一人署名活動」、広島と長崎研修、スイスの国連欧州本部派遣に参加しました。

Q3 活動の中で印象に残ったことを教えてください。

A3 署名活動中に、署名をしてくれた戦争を体験した高齢の女性の方が、今の世界情勢を見て、「また戦争が始まるのではないかと不安に思っていたけれど、こういう活動があるな」という言葉を聞いた。若い世代が行っている、これからの世界、捨てたもんじゃないね。」と言ってくれたことです。この言葉を聞き、自分たちが行っている活動は、すごく些細なこと

意味のあることだと気づかされました。

Q4 活動を通して「平和」とはどのようなものだと考えますか。

A4 「平和」は意外と脆いもので、日々平和は脆くなりつつあると思います。大使になる前は、日常はいつも変わらず、永遠に続くものだと思っていました。しかし、務めた後では、発射できるミサイルは日々増えていくことを学び、いつこの日常が壊れるかが分からない、「日常の脆さ」、逆に言えば今の幸せがどれだけ貴重なものなのか分かりました。

Q5 今後の展望を教えてください。

A5 平和大使としての経験を活かして、今、科学者と平和について語り合う場を作る活動を行っています。平和大使を務めて、自分の世代や自分より若い世代にもっと平和を考えて欲しいと思いました。今、私たちの世代や私たちがより若い世代が平和に触れる機会はとても少ないため、私が考えた活動が他人が平和に触れる機会の一助かりたいと思っています。

昨年、原爆被害者の立場から核兵器廃絶を訴えてきた日本被団協(日本原水爆被害者団体)がノーベル平和賞を受賞した。日本のノーベル平和賞受賞は、1974年の佐藤栄作元総理大臣以来50年ぶりである。68年間に渡り核兵器廃絶を実現するために、被爆者の証言により世界

「ノーモアヒバクシャ」に訴えてきたことが受賞背景である。12月に行われた授賞式で、代表委員の田中熙巳さんは、実際に体験した原爆の怖さと年々減少していく被爆者の現実について語った。演説全体を通して田中氏は、「ノーモア ウォー」を強く主張した。

### 平和な世界を 「高校生一人署名活動」

高校生平和大使は、47都道府県から選考を通じた高校生が、世界で唯一核爆弾を投下された国として、核兵器廃絶と平和な世界を目指し、被爆地広島・長崎の声を世界に伝えている。

実際に行っている活動の一つである高校生一人署名活動は、核兵器廃絶を求める署名を集めている。現在までに集めた署名数は200万筆を超えた。集まった署名は毎年高校生平和大使に

よって、国連欧州本部に提出される。この署名活動は国連で唯一認められている署名活動と呼ばれており、国連欧米本部には高校生一人署名活動の署名展示棚が設置されている。